（２）岐阜県立郡上高等学校における実践

＜授業実践＞

①授業実践に向けての構え

前年度の反省より、今年度は実践的コミュニケーション能力の育成を目標に定めた。従来、高等学校の授業は、大学入試を念頭において行われることが多く、生徒が受け身になってしまう傾向があることから、生徒が主体的に参加できる授業を設定していくことが課題として挙がった。特に、英語を使っての自己表現、意思疎通の手段としての英語の活用を重視した効果的な授業形態を工夫していく必要性があった。

そのため、まず、４月当初に、３年間を通して身に付けさせたい力を英語科で確認し、各学年での目標を定め、そこから、どのような段階を踏んで生徒に学習させるかを話し合う中で、各単元の出口の姿を明確にもち、１時間ごとの授業を設定することの重要性を確認した。これは、昨年度の本プロジェクトにおいて、中学校の授業実践より学んだことである。また、中学校で身に付いた積極的にコミュニケーションを図ろうとする生徒の意欲を、高等学校でさらに伸ばし、自主的に学んでいける生徒を育成したいという共通認識のもとに授業を行った。

②第１回授業交流研究会

【期日】　平成１８年７月４日（火）

【公開授業】

・単元名　Polestar Reading Course　Lesson 10 Tourists of a Different Kind (Part II)

・授業学校・学年　郡上高等学校　３年

・主な提案内容

①様々な形態の音読練習（バズリーディング→シャドウィング→トランスレーション）を行った。練習単位も、クラス→ペアというように個々の理解度を確認しながら、段階的に難易度を上げていった。

②指示語の指示内容を確認しながら、言い換えの表現を学んだ。

③本単元での新出言語材料を授業の中で何度も確認することで、表現の定着を図った。

【授業研究会】

・生徒が英語を話す時間が多く確保されていた。

・即時性はないかもしれないが、将来必要となる言語材料を確実に定着させることができた。その点において「実践的」であると言える。

・様々な音読形態があり、「易→難」へのハードルをいくつも設定することで、変化に富んだ練習ができた。

・生徒の理解度を確認しながら進めることができていた。

・読み取りはできているが、そこから自己表現に発展させることができていない。

・学級の中での個々の能力差が大きいが、英語の得意な生徒の力を十分伸ばしきれていない。

・リーディング活動の出口とは何か。「何ができればよいのか」「どのように評価するのか」という課題の提示と評価を行うべきである。

③第２回授業交流研究会

【期日】　平成１８年１０月２４日（火）

【公開授業】

・単元名　　Polestar English Course I　　Lesson 6　The Trip That Changed My Life

・授業学校・学年　郡上高等学校　１年（習熟度別編成クラス）

・主な提案内容

①文を意味のある単位ごとに区切り、内容を読み取る練習を行った。

②ある程度の長さでまとまりのある文章を読み､自分の考えを英語でまとめる活動を行った。

③ペアワークにおいて、自分の意見を相手に伝えること、そして、相手の話を聞き取る活動を行った。

【授業研究会】

・ブレーンストーミングでは生徒が主体的に課題に取り組むことができていた。

・既習の内容をもとにしたまとまりのある文章を提示したことにより、前後関係に意識して文章読解に取り組むことができた。

・既習の内容をもとにリライトされた文章に取り組むことにより、表現の幅を拡げることができた。

・ペアワークにより、生徒の集中力を高めることができた。

・話す、聞く活動を生徒中心に行うことができた。

・第１回目の研究会でも課題として指摘された自分の意見をまとめる力が不足している。表現する内容の指導が必要であった。特に、文章を読んだ後、その内容を内在化する時間が不足していた。パターンプラクティスや音読を行う必要があった。

・自分の意見を伝える出口の活動において、英語でメモをとる、英語でまとめるなど、書き写す練習が多く、生徒に与えるタスクが多すぎた。

＜グローバルスタンダードによる英語力分析調査＞

【期日】　平成１８年１１月９日（木）

【受験者】　７５名（２年生　４５名、　３年生　３０名）

３年生は全員、昨年からの継続受験。２年生は３分の１の生徒が昨年からの継続受験である。そのため、一年間英語を学習してきた伸びを図ることができると予想される。

【データ比較】

昨年度の結果との比較

Sect Ⅰ : + 1.62　　Sect II : +4.49　　Sect : III + 3.93　　Total : + 33.38

【結果分析】

昨年度に比べ、リスニング、リーディングどちらのセクションとも得点率が上がっている。前年度はリスニングとリーディングとの差が大きかったが、今年度はリーディングセクションでの伸びが大きかったため、大きな差は出なかった。これは、毎時間継続して行っている小テストによる知識の定着と、教科書等の学習において長文を読み解く練習を行っている結果であると考えられる。また、全体では、昨年よりも最低点が３０ポイント上がり、英語に苦手意識をもった生徒の基礎学力を伸ばすことができたと考えられる。同時に、上位の得点も前年度を大きく上回った。習熟度別の授業展開において、英語の得意な生徒には、より高度な課題を与えることができたためであると考える。

セクションごとの結果を見ると、Ⅰのリスニングは点数としては前年度から微増であったが、上

位と下位の差が狭まり、全体の伸びを感じられる。

一方で、II、III のリーディングでは、全体の点数は上がっているが、生徒間の差も広がっている。今後は、英語の得意な生徒に対しては、これまでのように、より高度な課題を設定し挑戦させていく一方で、英語の苦手な生徒に対してどのように力を付けさせていくかが課題である。

＜学習環境の充実＞

①外部講師による出張講義（その１）

【期日】　１１月１６日（木）

【講師】　岐阜女子大学理事長　杉山博文氏

【テーマ】国際理解と日本文化の理解

【内容】　最初に世界各国の文化と宗教観について講演をされた。特に、世界の宗教について学んでいる時期であったため、生徒は大変興味をもって聞いていた。また、「真の国際化は日本文化を知ること」に言及され、身近な話題から興味深い話を聞くことができた。これにより、生徒が自己のアイデンティティについて考えるきっかけとなり、その後の授業における研究課題となった。

②外部講師による出張講義（その２）

【期日】　１月２９日（月）

【講師】　外国人留学生２名

③サイドリーダーの活用

授業で使用するのではなく、希望する生徒に貸し出しをしている。自己の興味や力に合わせて、多様なレベル・内容の読み物に多くの生徒が取り組んでいる。特に、まとまりのある文章を多読したい３年生が多く活用している。

＜成果と課題＞

〇授業では必要なことを抜き出すなどの練習ができている。定期考査でも、ある程度の長さでまとまりのある文章を読まないと答えられない質問をするとよい。

〇習熟度別の授業を展開することにより、英語の得意な生徒の力を伸ばし、苦手な生徒に援助をすることができたため、TOEFL-ITP の結果に見られるように、全体的な英語力の向上がみられた。

〇中学校の授業を参観したことにより、終末の活動についての教師の意識が上がった。

〇従来に比べ、生徒が主体となった授業が増えている。特に、生徒が英語を話す時間が増えた。

●習熟度別授業では進度を合わせるのが大変である。また、定期考査は全クラス同じ問題であるため、レベルの設定が難しい。

●自分の意見をまとめるなどの自己表現について指導を強化する必要がある。表現活動は継続的な指導が必要である。英語科スタッフ全員が共通意識をもち、指導にあたることが求められる。

●受験のためにコミュニケーション活動が制限されるということはない。１年、２年次のみでなく３年間通して計画的に行っていかなければならない。